

様 式 C - 1 9、F - 1 9 - 1、Z - 1 9 （共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：3 2 2 0 2

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：2 1 K 0 0 0 1 4

研究課題名（和文）歌論・能楽論における観照の哲学的可能性：井筒俊彦・豊子による日本古典美学論の射程

研究課題名（英文）The Philosophical Possibility of Contemplation in Poetry and Noh Theory: The Range of Japanese Classical Aesthetic Theory by Toshihiko Izutsu and Toyoko

研究代表者

小野 純一（Ono, Junichi）

自治医科大学・医学部・准教授

研究者番号：2 0 8 4 7 0 9 0

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は井筒俊彦と豊子の著作『日本古典美学における美の理論』を中心に、日本中世の古典テキストを哲学のテキストとして読解し、自然観照の方法、実践、言語化をめぐる新たな哲学的地平を切り開く。その際、井筒俊彦『言語と呪術』における詩的言語の理解、特に言語発生をイメージ喚起として記述する立場を抽出し、前述の美学的研究の基礎として捉え、彼の晩年の主著である『意識と本質』も射程に含める。中世短歌と叙事詩・抒情詩としての能楽テキストを分析し、自然観と方法論の変遷を明らかにし、哲学的意義としては自然と個人の分離融合の問題ではなく、実在経験における主客変容を主題とすることと変容の言語化が探求されたことを示す。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、井筒俊彦の言語発生論が日本古典の美学的可能性の探究に資することを示した。彼は自身の言語理論を感性論に応用し、生涯にわたって日本古典の可能性を開拓した。このことから、彼が言語哲学だけでなく美学においても貢献したことが判明した。この側面の解明は、井筒を日本思想史に正確に位置付けることを可能にするという哲学史的意義をもつ。さらに、井筒理論を能楽に適用できることも確認できた。このことは、井筒哲学の創造性を解明することになった。井筒哲学が文化の分析や解釈に応用できる理論を提供し、日本古典の自然観照の哲学的意義を解明し、現代哲学の問題意識に資する点が判明し、本研究は広く社会的意義を持つと言える。

研究成果の概要（英文）：Focusing on Toshihiko Izutsu and Toyoko's The Theory of Beauty in the Classical Aesthetics of Japan, this study reads classical texts from the Japanese Middle Ages as texts of philosophy, opening up new philosophical horizons on the methods, practices and verbalisation of the contemplation of nature. In doing so, this study takes Toshihiko's Language and Magic, an analysis of the language generation as image evocation, as the basis for the aforementioned aesthetic study, and also includes his late major work Consciousness and Essence in its scope to analyse medieval Noh as epic/lyric poetry. This suggests that the transition in terms of nature contemplation and method from Waka to Nohgaku and its philosophical significance lies not in the problem of the fusion/separation of nature and the individual, but in the matter of unfixing of subject and object in existential experience and the refinement of its method of verbal expression.

研究分野：哲学

キーワード：言語哲学 美学 日本古典 和歌 短歌 歌論 能楽 能楽論

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

代表者はこれまでの研究で以下の3点にわたって井筒俊彦（1914-1993）の言語論の実態を記述してきた。（1）第一に代表者は井筒自身が『言語と呪術』で「意味生成の条件」を分析・記述し、概念化を捉える言語理論を構築することを指摘してきた。（2）第二に代表者は井筒の「三部作」（*The Structure of Ethical Terms in the Quran*, Keio Institute of Philological Studies, 1959; *The Concept of Belief in Islamic Theology: A Semantic Analysis of Iman and Islam*, The Institute of Cultural and Linguistic Studies, 1965; *God and Man in the Quran: Semantics of the Koranic Weltanschauung*, The Institute of Cultural and Linguistic Studies, 1965）が自身の言語理論をアラビア語で書かれた神学的な思想分析に適用し、「意味生成の現場」を記述する、という理解を提示した。すなわち、これら三部作がイスラーム思想研究において基礎となり、井筒自身をイスラーム学者として認めさせた事実は、彼の言語理論が個別事例の分析を成功させる理論であることを指し示す、と言える点を論じた。（3）第三に代表者は井筒がこれらに続いて英語の主著『スーフィズムと老荘思想における哲学的な鍵概念の比較研究』（*A Comparative Study of Key Philosophical Concepts in Sufism and Taoism*, 2 vols., The Institute of Cultural and Linguistic Studies, 1966-67）において、自身の言語理論を異なる時代に異なる言語で書かれた経験についての語り（アラビア語で書かれたスーフィー思想と中国語で書かれた道家思想）の分析比較に応用し、複数の異言語で記された思考の共約可能性を提示した点を示した。これら全体を通して代表者は井筒を言語理論の思想家と見なす観点を提示したと言える。

これを踏まえ、代表者は、2019年度から2020年度にかけて「井筒俊彦の言語論における想像力の問題」（課題番号19K23015）において、概念化を捉える井筒理論が想像力論であることを記述する課題に取り組んだ。とりわけ、井筒が言語生成を論じる際に、概念化を避けつつ個別的なるものの経験を共約可能にする表現手法を考察した。これはすなわち以下の2点の解明につながった。（4）井筒理論に従うことで、中世の短歌が言語的意味の実体化を回避する表現の探究へと発展したこと、（5）その表現手法は想像力が潜在的な意味構造を現働化することで像化作用を遂行するにあたり絶え間ない像の変容を可能にするものであること、である。これら5点の成果は2021年に「存在の夜をこえて：意味の形象と垂直性」（『理想』706号、105-119頁）、『井筒俊彦：世界と対話する哲学』（慶應義塾大学出版会、2023年）1章から3章で公開した。

このような背景を踏まえ代表者は、井筒俊彦が井筒豊子（1925-2017）と書いた『日本古典美学における美の理論』（*The Theory of Beauty in the Classical Aesthetics of Japan*, The Hague; Boston: Martinus Nijhoff Publishers, 1981）に見られる美学・感性論、特に自然観照を、井筒俊彦の最初の英文著作である『言語と呪術』（*Language and Magic Studies in the Magical Function of Speech*, Keio University Press, 1956）および晩年の日本語主著『意識と本質：精神的東洋を求めて』（岩波書店、1983年）に見られる経験の記述と比較検討し、井筒理論の美学・感性論的な可能性と応用の可能性を探る必要性を見出した。その理由は次のとおりである。

井筒は『意識と本質』を中心に、自身の言語論の立場から和歌や連歌、俳句の美学を捉え返し、その自然観照（特に「眺め」）の意義に言及する。だが『日本古典美学における美の理論』が扱う対象のうち、詩歌形式をとる能楽作品（謡曲）は、井筒の他の著作においても、言語論から見た意義の言及や分析がなされることはほとんどなかった。このことは、物語と和歌の融合した謡曲に井筒理論が適用可能かを本人が検証していないことを示す。またこの問題を広く捉え返すとき、これまでの代表者の研究の延長として、『日本古典美学における美の理論』『意識と本質』を中心とした最晩年の思索も含め、言語論の可能性を追究する井筒哲学を統一的に記述するために、井筒の言語論と日本古典美学研究との内的連関、とりわけ中核となる自然観照の意義を解明すべきである、という問題意識が立ち現れてきた、と言える。この問題に関して代表者は連携してきた国内外の研究者と共に、『古今和歌集』『新古今和歌集』と歌論に見られる美学を主軸に、連歌から謡曲への展開も見据え、主として世阿弥と禅竹を中心にした謡曲および能楽論の美学を哲学的に分析することがとりわけ有意義かつ不可欠である、と考えた。そこで、直前の課題では範囲外であった井筒の言語論と日本古典美学研究との内的連関を検討することとした。

2. 研究の目的

代表者は「1. 研究開始当初の背景」で記した5点の前提となる研究を踏まえ、本研究の課題として以下の三点を研究目的に設定した。（1）井筒俊彦・豊子の美学・感性論が提示する自然観照の理念が、実際の謡曲においていかなる言語表現に当たるのかを確定する。（2）謡曲の語りによって与えられる観照の実態とはいかなるものかを確定する。（3）この確定にあたって、井筒俊彦・豊子の美学・感性論が和歌とりわけ短歌に対して行った分析が、謡曲の分析に適用可能かを検証しその理論の妥当性を確かめる。

代表者がこの三点に絞ったのはこれらの研究を通して、井筒俊彦の言語理論および俊彦・豊子の美学・感性論が謡曲の分析に適用可能かを検証し、その理論の妥当性を確認でき、「1. 研究開始当初の背景」から導出された問題意識に応答することが可能であると考えたからである。

井筒俊彦の言語理論および俊彦・豊子の美学・感性論によって、中世日本における自然観照という経験がいかなる「語り」として表現されているのかを記述すること、すなわちその言語論と美学・感性論の射程および有用性を精査する上記3点（「2. 研究の目的」の1～3）は、学術的・社会的寄与として、具体的には次の諸点を追究することを目的とする。すなわち、本研究は井筒俊彦の学術的寄与を再評価することを通しつつ、思想史的・個別研究としては井筒哲学の全体像を描くことで彼を日本思想史により精確に位置付けることへ貢献し、同時に日本中世の美学・感性論を記述すること、哲学的考察としては井筒の言語理論の妥当性や実用の射程を測ること、その実用によって中世的な自然観照から哲学的な意義を引き出すこと、その手法を方法論化することである。

思想史研究として、代表者は上記（「2. 研究の目的」の1と2）の具体化として以下の3点の解明を目的とした。すなわち、①謡曲の分析を通して中世日本の自然観照を記述すること、②自然観照に焦点を当てて平安末期から鎌倉・室町時代に至る世界観の変遷を捉えること、③能楽理解に新たな視座をもたらすこと、である。これら3点（①～③）は、井筒の言語論と美学・感性論的な研究および謡曲研究として思想史的寄与を目指すだけでなく、哲学的考察への寄与も目指すものである。哲学的考察として、代表者は上記（「2. 研究の目的」の2と3）の具体化として以下の2点（④と⑤）の解明を目的とした。すなわち、④古典（中世文藝）を哲学的に考察する方法を提示すること、および⑤古典固有の語りを現代哲学における美学・感性論的な問題に接続することで、経験をめぐる語りの哲学的思考に寄与すること、である。

代表者はこれらの研究全体として、井筒の言語理論および俊彦・豊子の美学・感性論に歴史的哲学的な妥当性のあることを示す、という目的を本研究の中心として見据えている。なぜなら、これらの研究と全体として有機的に遂行することで、日本古典への新しい理解をもたらすとともに、日本中世の文藝がもつ哲学的意義を明らかにすることが可能であり。またそこに展開される経験をめぐる語りの可能性を追究することを可能にしつつ、世界観を記述する手法の方法論化を行うことが可能になるからである。したがって、本研究は井筒の言語論や日本の古典文藝研究、とりわけ和歌解釈を基礎として、能楽の伝統において方法論化された古典的な自然観照を哲学の方法に転じることを目指しながら、これを通して、思想史的研究と体系的な研究を融合することを遂行し、概念化・対象化を回避しながらいかに経験を語ることができるのかを模索する現代哲学の探究に寄与しようとするものである。

3. 研究の方法

（1）第一に、代表者は研究史上これまで考察の対象となっていない井筒俊彦・豊子共著論文“Poetry and Philosophy in Japan”（1971）および“Far Eastern existentialism: haiku and the Man of wabi”（1973）、共著作 *The Theory of Beauty in the Classical Aesthetics of Japan*（1981）がいかなる美学・感性論的な理解を提供するものかを調査する。とりわけ、同書で論じられる短歌、連歌、能楽、茶道、俳句がもつ美学・感性論的な理念の変遷、表現方法の意義に着目する。これらの比較検討を踏まえることで、能楽がもつ独自性に焦点を当てる。この際、代表者は『古今和歌集』『新古今和歌集』を中心とする短歌、およびその理念をより長い詩作品へと展開する連歌における自然観照（特に「眺め」）の意義と対照させることで、自然観照の変遷を記述する。この記述を踏まえて、『日本古典美学における美の理論』や井筒俊彦の単著論文「認識フィールドとしての和歌」の理論的な妥当性を検証する。さらに井筒俊彦の単著『禅仏教の哲学に向けて』（*Toward a Philosophy of Zen Buddhism*, Prajñā Press, 1977）と彼の1967年から1982年までの講演録『東洋哲学の構造』（*The Structure of Oriental Philosophy: Collected Papers of the Eranos Conference*, 2 vols., Keio University Press, 2008）における美学・感性論的な論述をも参照する。これらを踏まえた上で、井筒俊彦・豊子の美学・感性論をまとめる。この作業準備は、これら研究書が取り扱う短歌を含む謡曲のうちでも、とりわけ自然観照を謡曲の語りの中心に置くテキスト群（『采女』『東北』『杜若』『定家』さらに『松虫』）を選定することを可能にし、またこれら謡曲に対して適用する問題意識と分析方法を明確にすることを可能にする。

（2）第二に、代表者は短歌や謡曲の実作を、中世において当の実作者たちが論述した理論書における自然観照の理念と比較検討する。理論書としては、歴史的変遷を把握するために『古今和歌集』の「仮名序」（905年成立）、鴨長明（1155-1216）の歌論書『無名抄』、慈円（1155-1225）の『愚管抄』、藤原定家（1162-1241）の『毎月抄』、能楽成立期に連歌を集大成した二条良基（1320-1338）の連歌論、『風姿花伝』を中心とする世阿弥すなわち観世元清（1363-1443）の論書、『六輪一露之記』を中心とする金春禅竹（1405-1470?）の論書を取り上げ、これらが提示する諸理念のうち自然観照の意義を扱う部分に着目する。とりわけ本研究では、その美学・感性論的な理念がいまだ考究されていない禅竹に焦点を当て、彼の謡曲を調査対象にする。代表者は、禅竹に至るまでの実作における自然観照の理念と表現方法の変遷を念頭に置きながら、実作と理論における自然観照の理念の変遷として記述する。この作業によって、本研究が引き出す理念を、当の実作者たちの理念から裏付けることを行う。この対照作業によって、実作者たちによる方法論、理念、実作を視野に置くことを可能にし、平安期から鎌倉・室町期にかけて自然観照の探究・表現技法・理念が辿る変遷の中で、禅竹の自然観照を特徴づけることを可能にする。

（3）第三に、代表者は井筒俊彦が『言語と呪術』で提示した「意味発生の条件」をめぐる理解を通して、『日本古典美学における美の理論』を中心として井筒俊彦・豊子の理論に基づくな

ら、能楽の美学・感性論において顕著な「意味発生の条件」をどのように論じることが可能であるのかを提示する。代表者は、このようにして導き出された「意味発生の条件」をめぐる理論を『采女』『東北』『杜若』『定家』さらに『松虫』に適用する。この際、代表者は、とりわけ『風姿花伝』や『六輪一露之記』を中心とする当時の論書に見られる自然観照の理論とその言語化が、『采女』『東北』『杜若』『定家』さらに『松虫』における「意味発生の現場」とどう対応するのかを記述する。これは、謡曲において眺められる「自然」の事物事象が「眺め」の意識において新たな「意味」として立ち現れるさまがどう表現されているのかを観察・記述することである。それとともに、井筒俊彦の「意味発生の条件」理論と、井筒俊彦・豊子の美学・感性論が、金春禅竹の『六輪一露之記』を中心とする理論および実作から、自然観照としての世界観およびその表現技法としての非実体化・非概念化の「語り」を引き出すことである。すなわち、井筒俊彦の言語分析の手法を援用することを基礎として、歴史記述と理論記述を同時並行で行う。

4. 研究成果

(1) 歴史研究のうち言語分析によって明らかになったのは次の点である。①まず井筒俊彦・豊子が日本古典の美学・感性論研究において、『古今和歌集』およびその「仮名序」など10世紀までの美学・感性論的理念を理論的な前提とする点を検証した結果、両者がその理念として引き出した〈言語的意味を實在とする立場〉(言葉は實在を指示する／言語的意味は實在であるという立場)が当時の文献からも確かめられた。②また、『日本古典美学における美の理論』などを中心とする共著群、そして井筒俊彦の単著『意識と本質』における日本古典をめぐる論述を中心に主張される美学・感性論的理念の歴史の変遷もまた確認できた。すなわち歌人たちは、實在を指示する言語の意味作用を現実から切り離し、意味内容(思想)において意味が機能する仕組みの分析的な把握およびそのようにして分析される複数の意味要素を「指示」ではなく、「想起」として機能させる表現技法の開発に、より自覚的に進むこと、そしてこのことを中心に考えることで『新古今和歌集』における美学・感性論的理念が、『古今和歌集』から区別されることが文献から確かめられた。③さらに、井筒俊彦・豊子が着目する自然観照(「眺め」「見る」「見渡す」として明確に区別されていない観照の意義が明らかになった。すなわち、自然観照(「眺め」「見る」「見渡す」)系の語群が表現するのは、この語群によって示される行為が、単に歌人としての観照主体に認識変容(「さめる」「さとる」)をもたらすにとどまらず、その主体・客体を含む場に変容(主として「めぐみ／みのり」)をもたらすこと、すなわち、観照のたびに場を共有する自然や人間における変容が場そのものの変容であるという自覚であることが判明した。これは『万葉集』(7世紀から8世紀)以来の「国見」が『古今和歌集』『新古今和歌集』と時代を経るごとに、政治的理念から美学・感性論的理念へと変容したことを示す、と理解できる。この側面は、井筒俊彦・豊子の日本古典の美学・感性論研究で言及されず、その到達点をさらに補う成果だと言える。この成果の一部は、代表者によって『井筒俊彦：世界と対話する哲学』(慶應義塾大学出版会、2023年)の第5章として公開することができた。

(2) 歴史研究のうち、謡曲が語る自然観照を、謡曲の実作と当事者による能楽理論と対照させることで、観世元清(世阿弥)および金春禅竹のテキストに即し、彼らの自然観照に限定した限りでの美学・感性論的理念が以下の点で明らかになった。世阿弥の「清経」と『風姿花伝』や『三道』を対照させながら、演劇のもつカタルシスあるいは供犠という役割に着目しながら、テキストとしての謡曲の言語的効果にも目を配った。その成果の一つとして、研究協力者の森瑞枝「冥途の生：修羅能の幽霊」『冥府考：死者の世界』(ノンブル社、2023年)が挙げられる。代表者・協力者は、謡曲とそれが謡い演じられる演劇空間が共有される中核としての観客(奉納を享受するはずの神仏から大衆まで)および共同体として、謡や演能が結束や浄化をもたらすという演劇のカタルシスに着目した。だが、それは西洋的な演劇理論に当てはめることを目的とした理解であって、現実には最終解決としての鎮魂や救いが描かれない場合が多いことが分かった。特に鎮魂の典型として名高い「清経」では、主人公ではない女性への慰撫や現実の人物としての清経の生を他者が生き直すことで共同体に共有されるメタレベルでの「眺め」の視座が創出される。短歌という詩から演劇テキストへの変遷の中で、感情の起伏を意味の重層性によって表現する短歌の技法を全体に配しながら叙事詩・抒情詩として展開される謡曲の成立は、個人における精神(「こころ」「たま」)の変容をもたらす「眺め」を、共同体とその構成要素(個人も神仏も)の「結束」「浄化」、そして他者の「死」という〈大いなる他者〉との「共生」(共同体の過去を形成してきた無数の無名の死者たちを含む)として転換する「こころ」「たま」「おもひ」の現働化であり、そのことを自覚化する自己がメタレベルで形成される経験であることが分かった。

(3) 哲学的考察として、代表者と協力者は井筒俊彦・豊子が日本古典の美学・感性論研究、特に『日本古典美学における美の理論』や同時期に書かれた『意識と本質』が意味発生の現場を探ることを明らかにした。これらは以下の論考で公開された。中山純一「心の現象学」『東京家政大学大学院紀要』第64集(1)、2024年、59-68頁、同「歌舞の現象学」『東京家政大学大学院紀要』第63集(1)、2023年、93-99頁、同「井筒俊彦における意識構造モデルのポテンシャル：『意識と本質』から『意識の形而上学』へ」『理想』706号、2021年、120-132頁、および森瑞枝「無分節はあはれとのみ発露する：本居宣長の言語哲学と井筒俊彦」『理想』706号、2021年、45-61頁。これらの研究で代表者と協力者は、『言語と呪術』や『日本古典美学における美の理論』『意識と本質』において、「意味生成」の現場において概念化を避けつつ個別的

なるものの経験を共約可能にする表現が探究されることを確証した上で、このような問題意識から謡曲においては、眺められる「自然」の事物事象が「眺め」の意識において新たな「意味」をもって立ち現れるさまが短歌の技法を活用すること、このことに加え、漢詩や仏教の語句を用いることで新たな「意味」を構成する要素が強調される仕組みを確認した。代表者は、このことを概念化や再認としての「再現」ではなく、謡を共有する場がキーワード／キーフレーズで想起させる「像」を喚起する仕組みとして、またその「像」を固定化させずに重層化することを可能にする仕組みとして捉え、このように「強調」を駆使する謡曲をこの技法によって演劇的カタルシスあるいは共同体の「結束」「浄化」「死者という過去との共生」を生き直す（再現する）経験として捉えられることを導き出した。これに関する思想史的・理論的背景は2023年9月9日に第7回 European Network of Japanese Philosophy で“On Izutsu and Yogacara”と題し、また2024年3月3日に第4回「場の言語・コミュニケーション研究会」で言語理論的問題として「〈主客を共に含む場〉はいかなる経験か」と題し発表した。単著として2023年9月に『井筒俊彦：世界と対話する哲学』において、『言語と呪術』と『意識と本質』の内的連関を解明し、井筒理論の射程や有用性を検証するために和歌・歌論に特化した記述を行った成果を謡曲の分析に転用できることを示す成果は、発生人類学会の年次国際大会 17th Annual Generative Anthropology Summer Conference, Tokyo, June 13-15, 2024 での発表“Surge of Experience as Origin of Language”として採択された。

(4) 井筒が自身の言語理論を感性論に応用し、生涯にわたって日本古典の可能性を開拓したことを精査した結果、言語理論を思想文化の理解へ応用できることだけでなく、美学・感性論の理解においても資することが判明した。この側面の解明は、井筒を日本思想史に正確に位置付けることを可能にするという哲学史的意義をもつ。さらに、井筒理論を能楽に適用できることも確認できた。このことは、井筒哲学の創造性を解明することになった。井筒哲学が文化の分析や解釈に応用できる理論を提供し、日本古典の自然観照の哲学的意義を解明し、現代哲学の問題意識に資する点が判明し、本研究は広く社会的意義を持つと言える。これらを踏まえ、代表者は上記協力者のほか海外の研究協力者とともに、上記の成果を含む井筒研究の成果を英文による論文集としてエディンバラ大学出版会から刊行することになった。同書を共同執筆するこれら研究協力者には、上記の中山純一（東洋大学）と森瑞枝（立教大学）のほか、日本からは、ハンス・ペーター・リーダーバッハ（関西大学）、檜垣立哉（専修大学）、永井晋（東洋大学）、長岡徹郎（大阪大学）、加藤隆宏（東京大学）、石田隆太（同志社大学）、澤井真（天理大学）、山川仁（天理大学）、バフマン・ザキプール（明治大学）、河原清志（拓殖大学）、ガーダ・サイード（東京大学）、海外からは小田崇晴（南方科技大学）、Ralf Müller（University College Cork）、Rodrigo Guerizoli（Universidade Federal do Rio de Janeiro）、Lucas Machado（Universidade Federal do Rio de Janeiro）、Diogo César Porto da Silva（Universidade Federal do Rio de Janeiro）、Rossa Ó Muireartaigh（当時、愛知県立大学）、Steve Lofts（The King's University College）が含まれる。本課題を通して、国際的な連携によって研究を遂行することができ、各分野の第一人者から若手までを含む国内外の研究者間で、これからの研究協力体制を構築することもかなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 森瑞枝	4. 巻 706
2. 論文標題 無分節はあはれとのみ発露する：本居宣長の言語哲学と井筒俊彦	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 理想	6. 最初と最後の頁 45-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山純一	4. 巻 63
2. 論文標題 歌舞の現象学	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東京家政大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 93-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野純一	4. 巻 706
2. 論文標題 存在の夜をこえて：意味の形象と垂直性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 理想	6. 最初と最後の頁 105-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山純一	4. 巻 64
2. 論文標題 心の現象学	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東京家政大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 59-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 4件）

1．発表者名 ONO, Junichi
2．発表標題 Izutsu's Metaphysics of Verbum
3．学会等名 VI Jornada de Filosofia Oriental da USP（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 小野純一
2．発表標題 井筒俊彦と 超越のことば
3．学会等名 東京ジャーミイ文書館（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 ONO Junichi
2．発表標題 Field Theory of Izutsu
3．学会等名 6th ENOJP Conference（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 ONO Junichi
2．発表標題 On Izutsu and Yogacara
3．学会等名 7th ENOJP Conference（国際学会）
4．発表年 2023年

1．発表者名 小野純一
2．発表標題 主客を共に含む場 はいかなる経験か
3．学会等名 第4回場の言語・コミュニケーション研究会（招待講演）
4．発表年 2024年

1．発表者名 ONO, Junichi
2．発表標題 Surge of Experience as Origin of Language
3．学会等名 17th Annual Generative Anthropology Summer Conference（国際学会）
4．発表年 2024年

〔図書〕 計4件

1．著者名 森本一夫・井上貴恵・小野純一・澤井真（共編著者）	4．発行年 2023年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 668
3．書名 イスラームの内と外から 鎌田繁先生古稀記念論集	

1．著者名 森瑞枝	4．発行年 2023年
2．出版社 ノンブル社	5．総ページ数 -
3．書名 冥府考	

1．著者名 小野純一	4．発行年 2023年
2．出版社 慶應義塾大学出版会	5．総ページ数 241
3．書名 井筒俊彦：世界と対話する哲学	

1．著者名 森瑞枝	4．発行年 2022年
2．出版社 勉誠出版	5．総ページ数 388
3．書名 中世神道入門：カミとホトケの織りなす世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--------	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------